日本赤十字社
Japanese Red Cross Society
愛知県支部
広報誌

日赤あいち

No. 144
2020.秋

▶東海豪雨から20年
愛知を襲った水害をあなたは覚えていますか

▶ 新型コロナウイルス感染症 緊急対策事業
▶ COVID-19 各国赤十字社の取り組み
▶ 「教室」で学ぶ水の事故防止教材を活用した授業
▶ 日赤愛知災害管理センター棟が完成
▶ クロスサポーターに聞く 豊橋市国際交流協会

田原市赤十字奉仕団 | 愛知県赤十字無線奉仕団 | 愛知県青年赤十字奉仕団 | 大治町赤十字奉仕団 | 尾張赤十字救急奉仕団 | 東海市赤十字奉仕団 | 半田市赤十字奉仕団 | 津島市赤十字奉仕団 | 岡崎市赤十字奉仕団 | 日進市赤十字奉仕団 | 名古屋学芸大学青年赤十字奉仕団 | 蟹江町赤十字奉仕団 | 弥富市赤十字奉仕団 | 愛知県赤十字救急奉仕団 | 南山大学青年赤十字奉仕団

赤十字奉仕団
ボランティアリレー
ボランティアとして活躍する奉仕団がリレー方式で登場

今号の奉仕団
大治町赤十字奉仕団
委員長　若山 久美子

子どもたちに赤十字の精神を伝えたい！

こんな活動をしています

大治町赤十字奉仕団は、幼児安全法・救急法・健康生活支援講習などの講習会の開催や、「幼児期から赤十字の精神を伝えていきたい」という思いから、町公民館・子育て支援センター及び保育園と連携を図りながら、大型紙芝居の読み聞かせや防災ボードゲーム「いえまですごろく」を用いて児童の健全育成活動を行っています。また、地域の自主防災会の集いに招かれた際には、災害に備えて身を守る方法について、参加者と交流をしながら学んでいただいています。

子どもたちをはじめ地域の方々に、より一層赤十字の精神や奉仕活動を知ってもらうため、委員長を筆頭に私たち奉仕団員は、元気に明るく活動しています。

1／寄贈したマスクを前に大治町長と語らう若山委員長
2／地元ケーブルテレビにも取り上げられました
3／奉仕団員によるマスク製作の様子

イチオシポイント

コロナ禍で私たちにできること

新型コロナウイルスの影響により深刻なマスク不足が起こった3月。私たちが今、できることをしようと救護活動用に頂いた綿布を利用して、「手作りマスク」を作ることを決めました。大人用・子ども用の2種類のマスクの型紙を手書きし、一から製作。早速役立てていただこうと、まずは200枚を社会福祉施設などへ寄贈しました。

このような状況だからこそ、私たちにできることがあると信じて、感染予防策を行いながら製作しています。困難なときこそ、地道ではありますが、継続して奉仕活動を行っていきたいと考えています。

活動資金

ご協力ありがとうございます

日本赤十字社愛知県支部へ活動資金として多額のご寄付をいただいた法人様

- 株式会社ヤマナカ 様
- 株式会社フィールコーポレーション 様
- キッズープラス株式会社 様
- 三協化成産業株式会社 様
- 株式会社フェニックス 様
- 中部電力株式会社 様
- 江口光株式会社 様
- ホッコー株式会社 様
- 株式会社いずみ建設工業 様
- オリエンタルビル株式会社 様
- オリエンタル興産株式会社 様
- 株式会社ニシ 様

ご協力をお願いいたします

赤十字事業は、皆さまからの活動資金のご協力によって支えられています。

郵便振替口座／00860-1-732 日本赤十字社愛知県支部

郵便局備え付けの払込取扱票でお手続きください。ご不明な点は日本赤十字社愛知県支部事務局総務企画部赤十字会員課まで。

TEL 052-971-1596（直通）

PRESENT プレゼント

5名様に **ハートラちゃんぬいぐるみ**

日本赤十字社公式キャラクター「ハートラちゃん」のぬいぐるみです。高さ10センチほどのミニサイズ（ストラップ付）です

応募先
MAIL aichi-koho@aichi.jrc.or.jp
FAX 052-971-1586
郵送 〒461-8561 名古屋市東区白壁1-50 日本赤十字社愛知県支部「日赤あいちプレゼント」係

【明記事項】
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤「日赤あいち」の入手先 ⑥ご意見・ご感想など 締切／令和2年11月30日必着

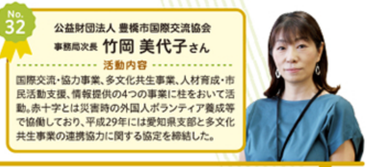
日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 愛知県支部 日赤あいち
〒461-8561名古屋市東区白壁1-50　TEL052-971-1591（代表）
発行元／日本赤十字社愛知県支部　発行日／令和2年10月1日

Twitter
活動の詳細や最新情報はウェブサイトかSNSへ
日赤あいち 検索
www.aichi.jrc.or.jp
Instagram
NISSEKI_AICHI

クロスサポーターに聞く!!
Interview

日本赤十字社愛知県支部とタイアップし様々な活動に取り組む企業、団体、人物を紹介します。

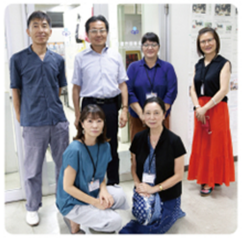
No. 32
公益財団法人 豊橋市国際交流協会
事務局次長 竹岡 美代子さん
活動内容
国際交流・協力事業、多文化共生事業、人材育成・市民活動支援、情報提供の4つの事業に柱をおいて活動。赤十字とは災害時の外国人ボランティア養成等で協働しており、平成29年には愛知県支部と多文化共生事業の連携協力に関する協定を締結した。



正しい防災・減災の知識を広め地域の多文化防災を進めていきたい

赤十字との協働のきっかけ

平成22年度に災害時に外国人被災者を支援する通訳ボランティア派遣の協定を豊橋市と結び、ボランティアの登録制度を開始しました。年々登録者数は増え、外国人住民にも広がり始めたため、通訳以外にも支援の幅を広げられないかと検討し始めました。しかし、そのための研修を継続して実施するには、専門性のあるパートナー探しが課題となっていました。そんなとき、豊橋市を通じて赤十字との協働を提案いただきました。



豊橋市国際交流協会のメンバー

赤十字というと、災害救護活動や国際活動を行うプロ集団というイメージで、正直あまり身近な存在ではなかったのですが、多岐にわたる事業展開の中で外国人ボランティアの養成事業を検討されていることを聞き、ぜひ一緒に取り組もうと協働が始まりました。

これまでの赤十字との取り組み

当協会のボランティア向けに赤十字救急法や幼児安全法、避難所生活で役に立つ知識や防災セミナーなど、実践的な研修の機会を設けています。外国人住民には「やさしい日本語」を使った講習会も行っており、これまでに外国人ボランティアの中から赤十字救急法の講習指導員3名が誕生しました。彼らの活躍により、母国語を使った講習会や防災セミナーを開催できるようになり、日本語がハードルとなっていた方々へも防災・減災の知識を広める機会を提供することが可能となりました。目標としてきた災害現場で実践的に活躍できる人材の育成が推進でき、大変嬉しく思っています。

救急法講習や防災セミナーなどで活躍する外国人ボランティア

新型コロナウイルス感染症への対応と今後の取り組み

外国人住民の中には給付金や緊急貸付の制度などの情報をうまく受け取れていない方がおり、情報提供や手続きの相談に乗ることもありました。コロナ禍を受けて、新たな脅威が起こったとき、外国人住民に対してどのように迅速に正しい知識を提供し理解してもらうか、ということが課題であると改めて認識しました。災害時通訳ボランティアや、外国人相談員スタッフを通じて日頃からネットワークを構築し、よりスムーズな情報提供ができるようにしていきたいと思います。

災害が頻発する中、さらなる多文化防災を進めていくには、やはり住んでいる地域を知ること、地域住民とつながること、そして正しい情報を入手することが重要だと考えます。そのためにも赤十字と協働し、日頃から外国人住民の「自助」を啓発するとともに、正しい知識をもったボランティアの養成や、その活動の場の提供をさらに進めていきたいです。

TOPICS トピックス

活動やイベントをご報告します

NEWS 子どもたちの学ぶ機会を守りたい

新型コロナウイルス感染症緊急対策事業

今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、教育現場ではオンライン学習の必要性が高まっています。しかし、限られた運営費の中で子どもたちの生活を支えている児童養護施設や、外国人学校・日本語教室では、オンライン環境の整備を速やかに進めることは難しい状況にあります。

愛知県支部では、こうした子どもたちの学ぶ機会を守りたいと考え、関係機関のご協力の下アンケート調査を行い、オンライン機器が不足していると の回答があった児童養護施設、外国人学校・日本語教室を対象として、令和2年8月に60施設ヘタブレット端末計400台及びネットワーク機器計44台の寄贈を行いました。

寄贈先の施設からは「三密回避のために生徒を分散させようにも、場所も人手も足りないといった課題の多い状況だったが、タブレットがあれば子どもたちが学習を続けることができます。」「進路実現のために頑張ります。」など、様々な嬉しい声を寄せていただいています。

NEWS 「日赤愛知災害管理センター棟」が完成

災害医療のマネジメント拠点として

令和2年8月、愛知県の地域中核災害拠点病院である名古屋第二赤十字病院の南側に、日赤愛知災害管理センター棟が竣工しました。これは、南海トラフ地震の発生などの際に、地域の災害医療の拠点となるべく建設された、病院が所有する施設としては全国的にも珍しい災害対応に特化した施設です。2階から4階は免震構造となっており、非常用発電機や地下水浄化システムなどが備えられています。

発災時には、全国の赤十字救護班やDMATなど多くの医療チームの受け入れの拠点となり、災害対策本部が設置され災害マネジメントを行います。

平時は、地域の皆さまや医療者向けの様々な研修や、子ども達への防災・減災教育などの場としての活用を予定しています。また、施設内には日本赤十字豊田看護大学のサテライトキャンパス（10月開講）も併設されています。

日本赤十字社は、災害時も平時も地域の安全のため災害対策を進めてまいります。

REPORT 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と世界の赤十字

～各国の実情に合わせた様々な活動を展開中～

世界中で感染が拡大しているCOVID-19に対し、世界各地の赤十字・赤新月社においても、感染予防啓発リーフレットや衛生キットを配布したり、自宅待機や隔離対象の人々に薬や食料を届けたりするほか、患者搬送、医療活動、感染者や隔離者に対するこころのケア電話相談など、様々な活動が展開されています。しかし、紛争などの人道危機により基礎的な医療体制が元々脆弱な地域においては、COVID-19の感染拡大により二重の危機に直面しており、国際的な支援の必要性がさらに高まっています。

日本赤十字社は毎年12月にNHKと協働し「NHK海外たすけあい」募金キャンペーンを展開しており、キャンペーンで集まった寄付金は世界の苦しむ人々の命と健康を守る赤十字の活動に使われます。詳細は11月下旬に当支部ウェブサイトなどでお知らせします。皆さまの温かいご協力をお願いいたします。

「偏見ではなく連帯感を」と訴える国際赤十字・赤新月社連盟

REPORT 教室で学ぶ水の事故防止

～教材を活用した授業を実施～

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、学校現場では水泳の授業の中止が相次ぎました。そこで、愛知県支部では着衣泳講習が実施できない状況に対応するため、水の事故防止について学べるスライド教材を作成し、青少年赤十字加盟校（小学校）へ配布しました。

この教材を使用して実施された授業が7月15日、岡崎市立城南小学校において開催されました。子どもたちはライフジャケットの正しい着用方法や、着衣のまま水に落ちてしまった場合の浮き方、身近なものを使って浮く方法などを学びました。

クローズアップ CLOSE UP

～東海豪雨から20年～ 愛知を襲った水害をあなたは覚えていますか

平成12年9月11日から12日にかけて、東海地方は記録的な豪雨に見舞われました。愛知県下では名古屋市、西枇杷島町・新川町（現・清須市）、大府市、東浦町などを中心に6万棟を超える家屋が水に浸かる大きな被害を受け、愛知県下では20の市町（※）において災害救助法が適用されました。

災害発生から20年を迎えた今年、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、感染対策をした避難行動を求められている一方、地域における防災訓練への参加機会が減少している状況の中、いつ起こるかわからない災害に私たちはどう備えたらいいのか。災害の記録、そして体験談からそのヒントを探ります。

本記事の詳細版をウェブサイトに掲載しています

その時赤十字では

愛知県支部は11日19時に第二非常配備をとり、21時には災害対策本部を設置、情報収集や救援物資積込作業などの活動を開始しました。被害が甚大であった西枇杷島町へは、医療救護班を派遣し、避難所の巡回診療や町内に設置された救護所での診療を行いました。

全国から届けられた支援

本社や各県支部の応援により、毛布、日用品セット、見舞品セットなどの救援物資を名古屋市、西枇杷島町、新川町などをはじめとする被災地へ配布しました。また防災ボランティアも全国の支部から集まり、被災地の復旧へ大きな役割を果たしました。

その時避難所となった小学校では

4トンの貯水が一夜にして空に

堤防を決壊した水は短時間に町内へ押し寄せたので、逃げ遅れて腰まで水に浸かった多くの避難者が体を洗うために水を使用しました。翌朝には貯水は底をつき、トイレを流すためにプールから水を運ぶ必要があり大変苦労しました。電気も止まったためパソコンやコピー機も使えず、避難所の受付名簿を手作りするなど想定外のことばかりでした。

当時新川町立新川小学校の教務主任として避難所運営に携わった、太田慎一さん（現・赤十字奉仕団支部指導講師）

イメージとのギャップ

避難所となれば支援物資や炊き出しなど、様々な支援の手が差し伸べられるものと思っていました。しかし、周囲がほとんど浸水し、陸の孤島となった当校に届いたのは配給の菓子パンだけ。数日もすると、避難者から不満の声が上がりました。そんなとき避難していた児童がパンの配布を手伝ってくれ、避難所内に笑顔が戻ったことはとてもありがたかったです。

困難なときこそ思いやりの心を

児童の活躍もそうですが、避難所はそこにいる皆で、長い避難所生活をどのように快適に過ごせるかを話し合い、助け合って運営していくものなのだと思います。新川小はそれができていた避難所でした。避難者が自宅に戻った日、使用されていた校内の清掃に行くと、どの教室もトイレもきれいに掃除され、黒板一杯に学校へのお礼のメッセージが書いてありました。いろいろと苦労のあった避難所運営でしたが、この教室の光景は忘れられない嬉しい記憶です。

その時ボランティアは

～水害ボランティアセンターの立ち上げから後片付けまで～

コーディネーターデビュー戦、マニュアル通りにはいかない

私は県の防災ボランティアコーディネーター養成講座修了者として、愛知・名古屋水害ボランティア本部のもと、名古屋市北部水害ボランティアセンター（以下北部VC）の運営に関わりました。15日からボランティア受付を開始すると、最初の3日間には毎日数百名のボランティアが集まり、そのオリエンテーションや相談対応、ボランティアからの報告を受けたり、相談対応を行ったりするのもコーディネーターの役割でした。

名古屋市北部水害ボランティアセンターの運営に関わった、新谷倫突さん（現・愛知県赤十字災害救護奉仕団員）

まず苦労したのは被災地と北部VCとのアクセスです。北部VCと被災地とは公共交通機関で40分程度かかり、ボランティアの移動手段の確保に大変苦慮しました。市バス特別便の無料運行が決まったときには、とても嬉しかったです。当時は通信環境も悪く、被災地では電話もつながりにくかったため連絡調整も大変でした。そのため現地にニーズ受付のためのサテライト窓口を置くことを決めました。

ボランティアの主な活動は、浸水した家財道具の片づけや畳の運び出し、泥の除去や拭き掃除などでした。当初の依頼内容とは異なることを現地で突然頼まれ、ボランティアが困惑するケースもありました。そういったボランティアからの報告を受けたり、相談対応を行ったりするのもコーディネーターの役割でした。

活動を振り返って

北部VCには多くの人が集い、それぞれの多様な能力を活かして活動していました。本当に多くの人々の協力があって、北部VCを運営することができたと思います。もちろん災害は起こらないのが一番ですが、この東海豪雨が名古屋の防災ボランティアを育てたとも言えるんじゃないかと思います。

～災害救護奉仕団としてこれからの災害を考える～

救援物資の配布に奔走

12日の朝早く、応援依頼の電話をもらい支部に駆け付けました。当初は全国から届く大量の救援物資と各地区のニーズを把握し、物資配布計画を作成するとともにその積み下ろしを行いました。14日からは県庁の愛知・名古屋水害ボランティア本部横に設けられた赤十字ボランティア受付を担当しました。

当時一番の若手防災ボランティアだった、野牧泰士さん（現・愛知県赤十字災害救護奉仕団委員長）

これからの災害の備え

当時と比べ、気象レーダーの技術は格段に進歩しました。これを使わない手はありません。最近は自然災害が頻発していますが、人は慣れてくるとどこかまだ大丈夫と思ってしまう危険があります。現代は情報が多く入る分、受けとり手の判断が重要になってくると思います。

また、コロナ禍では密集を避けるため、状況に応じて自宅高層階に垂直避難という選択肢も考えられると思います。この場合、非常持出袋に加え高層階に置く非常用備蓄（作業着や衛生材料、日用品、虫よけ、コンロなど在宅避難に役立つ道具を入れた箱など）が有用だと考えています。そして感染拡大状況によっては県外ボランティアが活動できない場合も考えられます。近所での助け合いが改めて必要になるのではないでしょうか。

今、災害がおきたら ～コロナ禍の災害に備えて～

日頃からハザードマップを確認し、地域の危険箇所や避難場所などを知っておくことはもちろんですが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、避難時の感染対策などの情報が追加されている場合があります。まずはお住まいの自治体のホームページなどを確認し、最新の情報を入手しておきましょう。

新型コロナウイルス感染症の蔓延期には、避難所内においても感染症対策に万全を期すことが重要です。非常持出品に、体温計やマスク、消毒液、スリッパ、ごみ袋なども加えておくことが推奨されています。

当支部では災害時に開設される指定避難所等の環境整備支援を目的として、マスク、消毒液、段ボールベッド、パーテーション等の準備を進めています。

1／がれきを片付けるボランティア
2／西枇杷島における医療救護班の巡回診療
3／救援物資の積込作業